

# 日本吳音系字音の祖系音に就いての試論

-朝鮮漢字音との比較對照を通して-

金正彬\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 日本吳音と朝鮮漢字音の音韻的對應關係
  3. 日本吳音と朝鮮漢字音の音韻相通の類似点
  4. 日本吳音と朝鮮漢字音の重層的類似点
  5. 六朝期の陸德明『經典釋文』との關わり
  6. 朝鮮漢字音と對應しない日本吳音について
  7. 伝來経路について
  8. まとめ
- 

## 1. はじめに

日本吳音に於いて朝鮮漢字音は、その音韻と聲調に於ける類似性のために祖系音論の範疇で度々問われてきたが、未だその關わりに就いて具体的に解明できる段階ではない。現在、日本側では日本吳音系資料に見られる字音の祖系音に就いて、見解が分かれている。一つは山田孝雄博士の六朝期南方音の直接傳來說(『國語の中における漢語の研究』1994, p.140)がそれであり、これによると朝鮮漢字音の介在と影響への可能性は一応排除される。もう一つは滿田新造博士の中國南方音が朝鮮半島に一旦定着後日本に傳來した說(『中國音韻史論考』1964, pp.606, 624)であり、これによると朝鮮漢字音の介在と影響の程度は甚大である。このような對立的異見は要するに日本吳音の祖系音となるものが中國南方音(の直接伝來)か、朝鮮音(による間接傳來)かの問題となる。

このような日本吳音系字音に於ける祖系音に就いての究明は、日本吳音が抱えている複雑な体系、或いは、字音の重(複)層に對する解明の際に、時代性を以って説明するべきか、方音によって説明するべきかという、殘された課題を明らかにするに必ずしも意味が無いとは言え

---

\* 위덕대학교 일본어학부 전임강사

ないであろう。

本稿で扱う日本吳音系資料は以下のようである。

- ①『安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經』(東辻保和『訓点語と訓点資料第四十四輯』1971, 訓点語學會)
- ②『大般若經音義』(築島裕『大般若經音義の研究』1983, 勉誠社)
- ③『法華經音義資料』(小倉肇『日本吳音の研究』1995, 新典社)
- ④『觀智院本類聚名義抄』(風間書房)

日本漢音資料としては『長承本蒙求』(沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997, 汲古書院, pp.278-347)、『佛母大孔雀明王經』(原裕『訓点語と訓点資料第101輯』1998, pp.1-47)、朝鮮漢字音資料としては河野六郎博士の朝鮮漢字音「資料音韻表」(『河野六郎著作集 2』1979, 平凡社)を参照し、中古音体系によって示す。上聲字・去聲字は平聲字で代表する。

## 2. 日本吳音と朝鮮漢字音の音韻的對應關係

日本吳音と朝鮮漢字音の類似性に就いては、嘗て満田新造博士によって論じられたことがあるが、本稿では兩字音が、どのような点でどのように類似するのかについて幾つかを検討し、それが決して朝鮮漢字音による特質ではないことを、陸徳明『經典釋文』の反切事象などを手掛かりにして論じたい。

これに当たって、先ず、日本吳音系資料には漢音系字音が相當混在しているため、それを抜き出す作業を兼ねて行うが、その詳細は省略して示す。また、本稿では便宜上、聲調は無視し、後論で扱う。

### 2-1. 臻攝

満田新造博士によって論じられたことがある<sup>1)</sup>が、更に補う必要がある。日本吳音系資料に見られる欣韻字を中心として要約して示すと、以下のようである。

---

1) 満田新造(『中國音韻史論』1964, pp.606-624)は臻攝において欣韻字を中心として述べ、その上、牙音・喉音に限られるとの研究結果を出した。しかし、実際には欣韻字だけでなく、臻攝全体から類似性が見られる。

<表1>

中古音	該當字	日本吳音	漢音	朝鮮漢字音
欣韻 三乙見母	筋	コン	kin	kun
	筋	コン	kin	kun
	斤	コン	kin	kun
群母	勲	ゴン	kin	kun
	勤	ゴン	kin	kun
影母	慇	ヲン	in	un
	殷	オン	in	un
陰韻 見母	謹	コン	kin	kun
迄韻 見母	訖	コツ	kitu	kuul

欣韻は唐代中期になって眞韻三乙に合流したために、日本漢音では皆、中心母音*i*として反映している。日本吳音*o*音形と朝鮮漢字音*u*は対応<sup>2)</sup>しており、牙音・喉音に限られている点でも類似している。

このような類似性は、欣韻の牙・喉音だけでなく、一等痕韻の牙・喉音字、眞韻三等乙字にも見られることである。

<表2>

中古音	該當字	日本吳音	漢音	朝鮮漢字音
痕韻 見母	跟	コン	kon	kun
影母	恩	ヲン	on	un
匣母	痕	コン	kon	hun

<表3>

中古音	該當字	日本吳音	漢音	朝鮮漢字音
眞韻 疑母	銀	ゴン	ギン	un
震韻 群母	覲	ゴン,コン	キン	kun
	謹	コン	キン	kun

また、このような類似性は開口音だけでなく、合口音にも見られる。

2) 上古以來  $\text{ə} > \text{o} > \text{u}$  の漢語史的系譜が想定されるものである。欣韻牙・喉音字に見られる  $\text{ə}$ 、 $\text{o}$  音形はその名残であろう。満田新造博士の前掲書, p.607. 拙論「臻攝に於ける韓國漢字音と日本吳音との類似点に就いて」(『日本語文學』26, 日本語文學會, pp.49-62) 参照。

<表4>

中古音	該当字	日本吳音	漢音	朝鮮漢字音
恩韻一合 幫母	奔	フン	ホン	pun
明母	悶	モン	ボン	mun
物韻三乙合幫母	弗	ボチ	フツ	pul
明母	勿	モツ	フツ	mul

朝鮮漢字音「弗」「勿」は、現在、調音点後退が行われ、皆、中心母音[u]となっている。このように見ていくと、物韻三乙合字「勿」「拂」「物」の中心母音uの調音点後退とともに、朝鮮漢字音資料に現れる文韻三等合諸字は、以下のような日本吳音と類似すると言える。

<表5>

文韻三等乙合並母	焚	ホン
明母	聞	モン
	蚊	モン
物韻 幫母	仏	ホチ

主に唇音であり、このような日本吳音と朝鮮漢字音との類似性は、満田新造博士が指摘したような牙・喉音に限らない。

## 2-2. 山攝

二等字に限って調べる。

<表6>

	日本吳音	朝鮮漢字音
山韻	辨ベン山セン 艱カン 愜・癩ケン 閑・限ゲン	艱 kan 愜・癩「kan / han」 閑・限「han」 山 san
刪韻	鬢マン 顔「ガン / ケン」 諫カン	顔 an 諫 kan
刪韻合	板ハン 攀「ハン / ヘン」 鬢・慢「マン」 撰セン 關・撰「クワン / クエン」 頑「グエン / グワン」 串「クエン / グエン」 慣「クワ / グエン」	關・撰・串・慣 (k <sup>w</sup> an) 頑 <sup>w</sup> an

日本吳音には、大きく a, e の二音形が並存している。王力、董同龢などの上古音研究の諸家は元部の推定中心母音を a としている。南北朝初期に入り、寒・桓韻は刪韻と合流するようになり、刪韻は早くから æn となり、en となった山韻と7世紀の切韻時代（『漢語史稿』王力 1980, p.96）には一類となる。従って、切韻時代に入って寒・桓韻が合流する前に刪韻 æn、或いは山韻 en とのゆれが發し、これによる e 音類の現れが自然に想定される。

つまり、山韻・刪韻の e 音形は、上古以後に南北朝に入り、æn, en として切韻系音と合流した漢語史によると後世の音形であることが無理なく想定される。日本吳音の刪韻「顔」、刪韻合「關・攢・頑」から見られる a, e 二音並存は、このような上古から中古に至る過渡期的音韻事象を反映していることとなる。このようにみると、日本吳音は初期切韻系音と上古音が一緒に見られる共時的實態を表していることがわかる。

朝鮮漢字音には、e 音形は存在しないために比較対象にならなく、a 音形として対応関係を表している。

### 2-3. 深攝

深攝に於ける日本吳音と朝鮮漢字音の類似性は鮮明である<sup>3)</sup>。

<表 7>

中古音	該當字	日本吳音	漢音	朝鮮漢字音
侵韻三乙見母	今	コム	キン	kum
影母	瘖	ラム	イン	um
寢韻三乙幫母	稟	ホム	ヒン	p'um
影母	飲	ラム ヲ	イン	um
沁韻三乙見母	禁	コム	キン	kum
影母	蔭	ラム	イン	um
緝韻三乙影母	邑	ヲフ / オフ ヲウ / オウ	イフ	up

唐代秦音体系に於ける三等甲乙の合流が行われる前の音韻事象がよく現れている。このようなことは他の朝鮮漢字音に於ける侵韻、寢韻、沁韻、緝韻の三等乙諸字からも確認できる。

3) 詳しくは拙論（『広島大學教育學研究科紀第二部51』2002, pp.283-290）に譲りたいが、ここでは一部を紹介する。

## 2-4. 流攝

流攝にも日本吳音と朝鮮漢字音の対応関係が見られる4)。

<表 8 >

	該當字	日本吳音	朝鮮漢字音
候韻定母	投	ツ	t'u
見母	鉤	ク	ku

<表 9 >

	該當字	日本吳音	朝鮮漢字音
厚韻並母	部	フ	pu
	母	モ	mo
見母	垢	ク	ku
	狗	ク	ku
疑母	藕	ク	u
曉母	吼	ク / クウ	hu
	參	ク	該字無し

<表10>

	該當字	日本吳音	朝鮮漢字音
候韻 明母	茂	ム	mu
	茂	ムウ	
	質	ム	mu
定母	豆	ツ	tu
來母	陋	ル	ru

これらの一等候韻字は、唐代秦音体系では皆、ou音形となったものであるが、日本吳音と朝鮮漢字音では相互対応する音形を捉えている。

## 2-5. 咸攝

<表11>

	日本吳音	朝鮮漢字音
咸韻	湛タム斬サム / ゼン 減カム / ゲム陷カム	湛 tam斬 ts'em 咸・陷 ham
銜韻	監カム	監 kam

4) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997, 汲古書院, p.452.

二等咸韻は一等字と変わらないa音形が主を成すが、「斬サム／ゼン」「減カム／ゲム」のようなa/eの二音並存があるため、漢語史的説明が要求される。二等咸韻は上古時代には侵部に属していたために当然、上古音としては一等覃韻の一部にあるようなo音形が想定される。しかし、o音形は見られず、a音形が主を成していることは中古音の影響のためで、このように見るとe音形は後代のものになる。これは以下のような例字から確認できる。

銜韻「懺セム」……………「石山寺藏不動念誦次第長曆元年」<sup>5)</sup> (1037)

咸韻「咸ハン／ヘン」……………「石山寺本妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」<sup>6)</sup> (天和三年<1683>刊)

これは各々、新漢音資料に属するもので、特に後者は江戸時代唐音資料から見られるものである。何れも中古時代の咸・嚴・凡韻の合流<sup>7)</sup>によるものであろう。

日本吳音の二等咸韻・銜韻に朝鮮漢字音はa音形に対応する。

## 2-6. 曾攝

<表12>

	日本吳音	朝鮮漢字音
登韻開	崩・朋「ホウ」 等・百・騰・縦「トウ」 肯・亘・都コウ 憎ゾウ	肯・亘 kung
登韻合	弘グ／グウ／ゴウ	弘 hoing / hong

<表13>

	日本吳音	朝鮮漢字音
蒸韻	徵チヨウ／テウ澄チヨウ陵リヨウ承・仍ジョウ 昇シヨウ兢ゴウ／キヨウ 藝 コウ	徵・澄「ting」承「sung」 兢kung

一等登韻と三等乙蒸韻は上古蒸部に属し、推定音として王力、董同龢などの上古音研究諸家によってəŋとされている。そのため、上古侵部(əŋ)との相通例<sup>8)</sup>が詩経から見られる。また、一等登韻と三等乙蒸韻から見られる万葉仮名o音形は、上古詩賦の押韻から見られる之哈韻o音<sup>9)</sup>と深い関わりがあるため、上古音の名残であると言えよう。

5) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997, 汲古書院, p.452.

6) 沼本克明 上掲書, 1997, p.616.

7) 王力『漢語史稿』1980, 中華書局, p.99.

8) 王力 上掲書, pp.93-94.

このような考え方を取ると、日本吳音のo音形は日本古音に連続した音韻として見られる。ただ、登韻一等合字「弘」にある「グ、グウ」は、各々、無窮會本・天理本、藥師寺本大般若經音義に見られるが、江戸時代唐音資料「小叢林略清規三卷」(1684)に同様の「グ」があるから、日本吳音「ゴウ」に比べて後代のものであると考えられる。

朝鮮漢字音は概ね、u音形であり、「弘hon」を含めて日本吳音のo音形に対応している。しかし、少数の三等蒸韻「徵」「澄」はi音形として、唐代中期以後の秦音体系を反映している『長承本蒙求』<sup>10)</sup>などの日本漢音資料には見当たらず、鎌倉時代將來の宋音資料「象耳泉律師寫『金光明懺法』」(1568, 1582)<sup>11)</sup>、「小叢林略清規三卷」(1741)<sup>12)</sup>などの新漢音資料に例があるため、これに等しい歴史的音韻として対応する。

### 3. 日本吳音と朝鮮漢字音の音韻相通的類似点

音韻相通は音韻的に共通するものとして、韻目上、區別が薄くなることを意味する。この観点でも日本吳音と朝鮮漢字音は対応する。

#### 3-1. 侯韻と尤韻乙

<表14>

	該字	侯韻		該字	尤韻乙	
		日本吳音	朝漢字音		日本吳音	朝鮮字音
中古						
並母	部	u	u	浮	u	u
明母	質	u	u	銖	u	u
	母	o	o			
定母	豆	u	u	胄	iu	iu
牙音	鈞	u	u	救	u	u
喉音	吼	u	u	優	u	u

侯韻・尤韻乙との相通は、六朝期的特徴である<sup>13)</sup>が、日本吳音と朝鮮漢字音は対応<sup>14)</sup>している。

9) 満田新造 上掲書, 1964, pp.624-63.

10) 沼本克明『近畿地方の古寺所藏文獻言語資料の総合的調査研究』1995, 平成6年度科学研究費補助金(総合研究A) 研究成果報告書, 研究代表者, 沼本克明, pp.136-163.

11) 沼本克明 上掲書, 1995, pp.136-163.

12) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』1997, 汲古書院, pp.548-622.

13) 坂井健一『魏晉南北朝字音研究』1975, 汲古書院, p.355, p37.

14) 拙論「流攝・遇攝に於ける日本吳音と韓國漢字音に就いて」(『日本語學研第七』2003, 日本語學會) 参照。



### 3-2. 虞韻乙と侯韻、尤韻乙

虞韻乙は遇攝三等に属している。日本漢音ではu形<sup>15)</sup>として反映している。『安田本』の日本吳音を抜き出す作業をし、それから朝鮮漢字音と比較したい。上聲の虞韻字と去聲の遇韻字は略し、平聲の虞韻字で代表する。

<表15>

廣韻	該字	日本吳音	朝鮮漢字音
幫母	趺	フ	u
	夫	フ	u
	扶	フ	u
	膚	フ	u
	鼻	フ	u
滂母	敷	フ	u
端母	株	チウ	(iu)
見母	拘	ク	u
	俱	ク	u
群母	衢	ク	u
	瞿	ク	u
	劬	ク	u
疑母	娛	コ / ゴ	o
	愚	ク	u
照母	朱	シュ	(iu)
審母	輸	シュ	(iu)
于母	于	ウ	u
日母	儒	シュ / ス	(iu)

皆、u形として侯韻・尤韻乙との比較表にあるような音形と極めてよく一致することがわかる。つまり、日本吳音に於ける虞韻乙と侯韻、尤韻乙との相通現象<sup>16)</sup>は、六朝期の音韻事象をよく表しているわけである。これに対する朝鮮漢字音も、日本吳音によく類似し、その相通事象に於いても例外なく一致する。

### 3-3. 登韻・蒸韻との相通

この相通事象は陸徳明『經典釋文』の李軌、郭象音義、または六朝期顧野王『玉篇』にも見ら

15) 沼本克明の前掲書, 1997.「長承本蒙求分韻表」と原裕の「佛母大孔雀明王經字音点分韻表」(訓点語と訓点資料第101輯)を参照。

16) 坂井健一氏によると、このような音韻相通は徐邈、劉昌宗、李軌、字林、沈重などの江南地域の音義家に多く見られる(坂井健一 前掲書, 1975, p.379)。

れる17)。<表12>の登韻、<表13>の蒸韻に於ける日本吳音はo音形として相通しており、朝鮮漢字音も同様である。

### 3-4. 嚴韻・凡韻との相通

嚴韻・凡韻は中古音体系では開合口の対応として相補関係にある。しかし、「切韻」以前の六朝期には併合韻として徐邈音義、顧野王「玉篇」には相通字音18)として見られる。

<表16>

	日本吳音	朝鮮漢字音
嚴韻	嚴コム	嚴əṃ劔kəṃ 欠huṃ / kəṃ 俺am
凡韻	劔ケン欠カン 凡・汎ホン範ボム 泛ボン/バン	凡・帆・汎「pəṃ」 悱・芻「mam」

## 4. 日本吳音と朝鮮漢字音の重層的類似点

日本吳音には幾つかの重層性が認められる。朝鮮漢字音にも例外なくその重層性は現れる。深攝を例にして示す。

<表17>

中古	該字	日本吳音	朝鮮漢字音
侵韻三等乙日母	任	ニム	im
見母	今	コム	kuṃ
寢韻三等乙幫母	稟	ホム	p'uṃ
影母	飲	ヲム	uṃ
沁韻二等 疏母	滲	サウ	səṃ
初母		サム (類聚名義抄和音)	ts'əṃ

深攝に於ける日本吳音では、i, o, a音形の三重層が見られる。朝鮮漢字音もこれに当たる音形19)が存在しており、綺麗に対応する。

17) 坂井健一 前掲書, p.377.

18) 坂井健一 前掲書, p.383.

19) 拙論「韓國漢字音と日本吳音との重層的類似点に就いて」(『廣島大學教育學研究科紀第二部51』)

## 5. 六朝期の陸徳明『經典釋文』との關わり

さて、これまでのことで確かに言えることは、その日本吳音と朝鮮漢字音との対応關係は朝鮮漢字音の特質ではなく、六朝期字音事象とも対応するということである。従って、その日本吳音と朝鮮漢字音との音韻的対応關係を以って日本吳音の祖系音を朝鮮漢字音のみに限定できなくなることは言うまでも無い。

六朝期の『經典釋文』に見られる反切事象は、既に、先學<sup>20)</sup>によって度々論じられているように日本吳音と共通するところが多くある。即ち、日本吳音の祖系音を探る観点では、類似範疇の比較研究だけでは決定しにくいいため、別の観点から探る必要がある。

## 6. 朝鮮漢字音と対応しない日本吳音に就いて

日本吳音と朝鮮漢字音とでは類似しないところもある。二等齒上音を代表して調べてみると以下ようになる。

### 6-1. 日本吳音に於ける二等齒上音

#### 6-1-1. 止攝

支韻初母平聲	差	シ
脂韻疏母平聲	師	シ
之韻牀母上聲	士	シ

#### 6-1-2. 遇攝

魚韻莊母平聲	沮	ソ/シヨ、俎	ソ
初母平聲	初	シヨ	
疏母平聲	疎	ソ	
語韻疏母上聲	所	シヨ	
初母上聲	楚	ソ	

2002, 廣島大學) 参照。

20) 高松正雄氏の「中古正音」(國語國文44-6)「字音「惑」「軟」について」(國語國文51-5)。沼本克明博士の「吳音系字音の祖系音について」(國語國文47-7)「侯韻字の仮名書き音形を通して探る吳音の祖系音」(國語國文52-1)などを参照。

御韻莊母去聲	詛	ソ/シヨ
牀母去聲	叻	シヨ/ジヨ
疏母去聲	疏	シヨ

### 6-1-3. 山攝

山韻疏母平聲	山	セン
刪韻初母去聲	羸	シヤ・キサ(ママ)
牀母平聲	撰	セ

### 6-1-4. 效攝

肴韻牀母平聲	巢	サウ
莊母上聲	爪	サウ
初母去聲	抄	セウ/シヨウ/シャウ

### 6-1-5. 假攝

麻韻初母二等開平聲	差	シヤ
牀母平聲	愬	シヤ
疏母平聲	沙	シヤ
疏母上聲	灑	シヤ
莊母平聲	詐	サ

### 6-1-6. 宕攝

陽韻初母二等平聲	瘡	サウ/サ
牀母	床	シヤウ
莊母二等去聲	裝	シヤウ

### 6-1-7. 梗攝

庚韻疏母二等上聲	省	シヤウ
耕韻莊母去聲	諍	シヤウ/ジャウ

### 6-1-8. 流攝

尤韻牀母二等平聲	愁	シユ
	愁	シウ

### 6-1-9. 深攝

侵韻初母二等上聲 凋 シム  
 疏母 去聲 滲 サウ

### 6-1-10. 咸攝

咸韻莊母二等上聲 斬 サム  
 斬 セム  
 斬 セン/ゼム

山攝刪韻初母二「羸」の「シヤ・キサ」は梵語の漢譯音形であるため、論外にする。

宕攝陽韻二の初母「瘡」は、「安田本」<sup>21)</sup>に「サウ16a, 16e, 20g, 34b, 49h, 50o, 55g, 59e, 60g, 61m, 65r, 67e」とあり、「無窮會本」「天理本」「藥師寺本」の「大般若經音義資料」(樂島裕 1983)にも同様の音韻形が見られるが、拗音形を見せている同攝の他正齒音とは、直音形を見せているという点で明らかな相違がある。また、深攝侵韻二の疏母「滲」も「安田本」に「サウ72 m」があり、「藥師寺本」にも同様の音韻形があるから、同攝同韻の他i音形と區別される。

このような直音類は遇攝魚韻二の初母「楚」を始め、一部のo音形、山攝山韻二の疏母「山」、山韻二の牀母「撰」のe音形、效攝肴韻二の牀母「巢」、莊母「爪」、假攝麻韻二の莊母「詐」のa音形、咸攝咸韻二の莊母「斬」のa, e二音形にも存するが、他に口蓋母音i、拗介母iを有する字音形もともに見られる。これは奥村三雄氏が魚語御韻の二等齒上音を例にして示した兩形の並存<sup>22)</sup>と一致するもので、「法華經音義字音對照表」(小倉肇『日本吳音の研究』1995)からも確認できる。

このように、「安田本」と「大般若經音義資料」などの日本吳音諸資料に現れる二等齒上音形は、直・拗音並存であることは注目される。これは齒音に於ける日本吳音的特質である。

## 6-2. 朝鮮漢字音に於ける齒上音

前記の日本吳音に於ける齒上音的特質は、朝鮮漢字音ではどのように現れるであろうか。→のある部分は、歴史的に音韻変化があることを意味する。

### 6-2-1. 止攝

支韻初母二等平聲 差 ts'a(類合)

21) 東辻保和氏の抜萃本による(『訓点語と訓点資料第44輯』1971, 訓点語學會)。例字の數字は頁、英字は行を表す。

22) 奥村三雄「いわゆる漢吳音の聲調について」『國語國文31-1』1962, p.13.

脂韻疏母二等平聲 師 so(論語)(書經)(易經)(訓蒙)(千字文)(類合)(詩經)  
 之韻牀母二等上聲 士 so(孝經)(論語)(書經)(易經)(訓蒙)(千字文)(類  
 合)(詩經)(中庸)(小學)

### 6-2-2. 遇攝

魚韻初母二等上聲 楚 ts'o(千字文)(詩經)

### 6-2-3. 臻攝

### 6-2-4. 山攝

山韻疏母二等開平聲 山 san(論語)(書經)(易經)(訓蒙)(類合)(詩經)(中庸)  
 刪韻疏母二等合平聲 刪 san(華東)(三韻)(奎章)(類合)(小學)

### 6-2-5. 效攝

肴韻莊母二等 上聲 爪 tso(訓蒙)(類合)(詩經)  
 牀母二等 平聲 巢 so(書經)(易經)(訓蒙)(類合)(詩經)

### 6-2-6. 果攝

### 6-2-7. 假攝

麻韻初母二等開平聲 差 ts'a(類合)  
 疏母 平聲 沙 sa(書經)(易經)(訓蒙)(千字文)(類合)(詩經)  
 疏母 上聲 灑 sa(華東)(三韻)(奎章)  
 莊母 平聲 詐 sa(類合)(華東)(玉編正音)  
 tsa(三韻)(奎章)(玉編)

### 6-2-8. 宕攝

陽韻初母二等 平聲 瘡 ts'ang(訓蒙)  
 牀母 床 sang(千字文)(類合)(華東)(玉編正音)  
 tsang(三韻)(奎章)、tsyang(玉編)  
 莊母二等 去聲 裝 tsang(論語)(訓蒙)(詩經)(中庸)

### 6-2-9. 梗攝

庚韻疏母二等 上聲 省 soing(類合)(千字文)→seng  
 耕韻莊母 去聲 諍 tsoing(訓蒙)→tseng

6-2-10. 流攝

尤韻牀母二等開平聲 愁 ts'u(玉篇)(三韻)(奎章)  
su(類合)(易經)(華東)(玉篇正)→(現代語)

6-2-11. 深攝

侵韻初母二等開上聲 凋 ts'om(華東)(三韻)(奎章)  
疏母 去聲 滲 s'om(類合)

6-2-12. 咸攝

咸韻莊母二等 上聲 斬 ts'om(類合)(千字文)(書經)→(現代語)

二等齒上音に於ける平安時代以後の日本吳音では、止攝諸韻、莊母「詐」を除いた假攝の大部分の字音、陽韻二の初母「瘡」を除いた宕攝の大部分の字音、梗攝、流攝、深攝の諸韻では拗介母のある字音形が見られた。しかし、この日本吳音形に對する朝鮮漢字音形は拗介母が見られない直音形となっている<sup>23)</sup>。

若し、日本吳音が朝鮮漢字音を祖系音としたとすれば、この二等齒上音に於ける日本吳音形に直音形が主流を成したに違いない。これは、日本吳音が朝鮮漢字音を祖系音としなかったことを傍証するものである。また、齒頭音に於ける日本吳音系字音には主に拗音形が認められているが、朝鮮字音では二等齒上音のような直音形<sup>24)</sup>が顯著に見られることも軌を一にするものであると考えられる。

そこで、既に先學により日本吳音は六朝期の共時的方音實態<sup>25)</sup>を表していると言う研究業績が成されているため、これと関連付けて六朝期の『經典釋文』に現れる字音を分析したい。二等齒上音に限って示す。

6-3. 二等齒上音に於ける六朝期『經典釋文』の反切事象

6-3-1. 除韻音義資料

支韻初母二等 平聲 差 初(魚韻初母二等平聲)/宜(支韻疑母三乙平聲)

23) 假攝麻韻莊母「榘」、效攝肴韻「抄、鈔、梢、鞘」など、巧韻「炒」、效韻「稍」など、止攝紙韻「揣」、流攝尤韻、有韻「擗」、宥韻、遇攝魚韻「菹」、虞韻「飀」に拗音形が認められる。これらは本來、拗音形であったものの名残りか、そうでなければ一つの揺れとして扱うべきかの問題が存在する。全体的に極稀であり、特に效攝に多くあるのは二等齒上音的特質よりは效攝的特質であると考えられる。

24) 特に止攝では殆どが二等齒上音と同様音形を捉えている。

25) 沼本克明「侯韻字の仮名書き音形を通して探る吳音の祖系音」『國語國文52-1』1983, 中央図書出版社, pp.15-34.

疏母		醜	所(魚韻疏母二等平聲)/宜(支韻疑母三乙平聲)
		纒	所(魚韻疏母二等平聲)/綺(支韻溪母三乙上聲)
	上聲	纒	所(魚韻疏母二等平聲)/綺(支韻溪母三乙上聲)
魚韻牀母二等	平聲	在	(哈韻從母一等去聲)/魚(魚韻疑母三乙平聲)
山韻初母二等	上聲	剗	初(魚韻初母二等平聲)/展(仙韻端母三乙上聲)
牀母		棧	在(哈韻從母一等上聲)/簡(山韻見母二等上聲)
		士	(之韻牀母二等上聲)/練(先韻來母三甲去聲)
肴韻牀母二等	平聲	巢	呂(魚韻來母三乙上聲)/交(肴韻見母二等平聲)
陽韻莊母二等	平聲	莊	側(蒸韻莊母二等入聲)/亮(陽韻來母三乙去聲)
牀母		牀	側(蒸韻莊母二等入聲)/敏(眞韻明母三乙上聲)
庚韻初母二等	平聲	鎗	勅(哈韻來母一等去聲)/庚(庚韻見母二等平聲)
疏母	上聲	省	所(魚韻疏母二等平聲)/庚(庚韻見母二等平聲)
尤韻莊母二等	平聲	騶	仕(之韻牀母二等上聲)/邁(侯韻見母一等去聲)
	上聲	擷	子(之韻精母三甲上聲)/俱(虞韻見母三乙平聲)
牀母	去聲	驟	在(哈韻從母一等上聲)/邁(侯韻見母一等去聲)
審母	平聲	收	詩(之韻審母三乙平聲)/救(尤韻見母三乙去聲)
		守	始(之韻審母三乙上聲)/救(尤韻見母三乙去聲)
侵韻莊母二等	平聲	簪	側(蒸韻莊母二等入聲)/林(侵韻來母三乙平聲)
		作	(唐韻精母一等入聲)/南(覃韻泥母一等平聲)
初母二等	平聲	參	所(魚韻疏母二等平聲)/林(侵韻來母三乙平聲)
咸韻疏母二等	上聲	慘	所(魚韻疏母二等平聲)/斬(咸韻莊母二等上聲)
		息	(蒸韻心母三甲入聲)/廉(鹽韻來母三乙平聲)

### 6-3-2. 劉昌宗音義資料

脂韻疏母二等合平聲	衰	初(魚韻初母二等平聲)/危(支韻疑母三乙合平聲)
支韻疏母二等	平聲	纒
霜	(陽韻疏母二等平聲)/綺(支韻溪母三乙上聲)	
魚韻牀母二等	平聲	鉏
測	(蒸韻初母二等入聲)/魚(魚韻疑母三乙平聲)	
虞韻疏母二等	上聲	簪
色	(蒸韻疏母二等入聲)/縷(虞韻來母三乙上聲)	
山韻初母二等	上聲	剗
側	(蒸韻莊母二等入聲)/展(仙韻端母三乙上聲)	
	測(蒸韻初母二等入聲)/展(仙韻端母三乙上聲)	
山韻牀母二等	上聲	棧
士	(之韻牀母二等上聲)/諫(刪韻見母二等去聲)	
刪韻牀母二等合上聲	饌	牀(陽韻莊母二等平聲)/轉(仙韻端母三乙合上聲)
肴韻疏母二等	平聲	梢
色	(蒸韻疏母二等入聲)/交(肴韻見母二等平聲)	
庚韻疏母二等	平聲	生
色	(蒸韻疏母二等入聲)/敬(庚韻見母三乙去聲)	



尤韻照母二等 平聲 叢 子(之韻精母三甲上聲)/侯(侯韻匣母一等平聲)  
 作(唐韻精母一等入聲)/侯(侯韻匣母一等平聲)  
 祖(模韻精母一等平聲)/侯(侯韻匣母一等平聲)  
 上聲 趣 祖(模韻精母一等平聲)/侯(侯韻匣母一等平聲)  
 尤韻牀母二等 去聲 驟 才(尤韻審母三乙上聲)/邁(侯韻見母一等去聲)

### 6-3-3. 李軌音義資料

魚韻牀母二等 上聲 鉏 測(蒸韻初母二等入聲)/魚(魚韻疑母三乙平聲)  
 虞韻疏母二等 上聲 數 色(蒸韻疏母二等入聲)/住(虞韻定母三乙去聲)  
 色(蒸韻疏母二等入聲)/注(虞韻照母三乙去聲)  
 佳韻疏母二等 去聲 泗 霜(陽韻疏母二等平聲)/寄(支韻見母三乙去聲)  
 尤韻疏母二等 平聲 搜 悉(眞韻心母三甲入聲)/溝(侯韻見母一等平聲)

### 6-3-4. 郭璞音義資料

支韻莊母二等 上聲 慙 時(之韻禪母三乙平聲)/紫(支韻精母三甲去聲)  
 魚韻疏母二等 平聲 蔬 山(山韻疏母二等平聲)/俱(虞韻見母三乙平聲)  
 肴韻疏母二等 平聲 蚰 蕭(蕭韻心母三甲平聲)  
 侵韻牀母二等 平聲 涪 岑(侵韻牀母二等平聲)  
 潛(鹽韻從母三甲平聲)  
 侵韻疏母二等 平聲 椽 霜(陽韻疏母二等平聲)/甚(侵韻禪母三乙上聲)

### 6-3-5. 字林音義資料

皆韻莊母二等 去聲 療 側(蒸韻初母二等入聲)/例(祭韻來母三乙去聲)  
 臻韻莊母二等 平聲 榛 仕(之韻牀母二等平聲)/人(眞韻日母三乙平聲)  
 疏母 統 所(魚韻疏母二等平聲)/人(眞韻日母三乙平聲)  
 所(魚韻疏母二等平聲)/慎(眞韻禪母三乙去聲)  
 刪韻牀母二等 上聲 胝 仕(之韻牀母二等平聲)/免(仙韻明母三乙上聲)  
 仕(之韻牀母二等平聲)/簡(山韻見母二等上聲)  
 山韻牀母二等 平聲 脾 士(之韻牀母二等平聲)/山(山韻疏母二等平聲)  
 麻韻莊母二等 平聲 滌 壯(陽韻莊母二等去聲)/加(麻韻見母二等平聲)  
 尤韻莊母二等 平聲 甃 壯(陽韻莊母二等去聲)/謬(尤韻明母三甲去聲)  
 侵韻牀母二等 平聲 岑 才(哈韻從母一等平聲)/心(侵韻心母三甲平聲)  
 上聲 甚 式(蒸韻審母三乙入聲)/忍(眞韻日母三乙上聲)

### 6-3-6. 沈重音義資料

佳韻疏母二等 去聲 洒 所(魚韻疏母二等平聲)/寄(支韻見母三乙去聲)

### 6-3-7. 沈旋音義資料

山韻牀母二等 平聲 脾 才(哈韻從母一等平聲)/班(刪韻幫母二等平聲)

### 6-3-8. 謝嶠音義資料

魚韻疏母二等 平聲 蔬 疏(魚韻疏母二等平聲)

虞韻疏母二等 上聲 數 色(蒸韻疏母二等入聲)/主(虞韻照母三乙上聲)

### 6-3-9. 孫炎音義資料

之韻莊母二等 平聲 ■ 災(哈韻精母一等平聲)

魚韻莊母二等 平聲 沮 慈(之韻從母三甲平聲)/呂(魚韻來母三乙上聲)

陽韻疏母二等 平聲 蟻 傷(陽韻審母三乙平聲)

### 6-3-10. 鄭玄音義資料

虞韻疏母二等 上聲 數 世(祭韻審母三乙去聲)/主(虞韻照母三乙上聲)

尤韻牀母二等 平聲 愁 子(之韻精母三甲上聲)/小(宵韻心母三甲上聲)

### 6-3-11. 何胤音義資料

支韻疏母二等 上聲 纒 霜(陽韻疏母二等平聲)/綺(支韻溪母三乙上聲)

稀に現れる三等甲の反切下字とともに三等乙を中心とした反切下字が大勢である。従って、これらは拗音形として想定される。

山攝山韻二の牀母「棧」を始め、效攝肴韻二の牀母「巢」、梗攝庚韻二の初母「鎗」、疏母「省」などの非齒音二等反切下字、そして、深攝侵韻二の莊母「簪」、流攝尤韻二の牀母「驟」などの一等反切下字は、日本吳音では直音形として現れたであろう。つまり、平安時代以後の日本吳音に於ける遇攝魚韻二の初母「楚」及び、一部のo音形、山攝山韻二の疏母「山」、山韻二の牀母「撰」のe音形、效攝肴韻二の牀母「巢」、莊母「爪」、宕攝陽韻二の初母「瘡」、深攝侵韻二の疏母「滲」のau音形、假攝麻韻二の莊母「詐」のa音形、咸攝咸韻二の莊母「斬」のa、e二音形などの直音類がそれであると考えられる。

このように見ていくと、二等齒上音に於ける日本吳音の直拗混在形は、正に六朝期の字音實態を傍証していることとなり、朝鮮漢字音との隔たりは避けがたい。これは四等齒頭音字を例にしても同様の結果が得られることは前述のとおりである。

## 7. 傳來経路に就いて

それでは、問題は上述のような日本吳音系字音の祖系音たる六朝期字音がどのような歴史的経路によって日本に伝わったかが、当然、重要な問題として浮かび上がる。これには、今までの論考に外されていた聲調的観点が有効かもしれない。

日本吳音の聲調は漢音と逆対応の傾向<sup>26)</sup>にあることはよく知られているとおりである。韓國側の『四聲通解』(1517)卷末の「翻譯朴通事(1347?)老乞大(1382?)凡例」には、漢音平聲(重輕)字は朝鮮音上聲・去聲字に対応し、漢音上聲・去聲字は朝鮮音平聲字(一部は去聲)に対応するという記事がある。これは概ね、日本吳音の聲調實態に対応し、興福寺仲算の『妙法蓮華經釋文』(976)に見られる漢音・吳音聲調の關連識語とも対応するものである。

また、朝鮮漢字音の平・去二聲調体系は、日本吳音の平・上二聲調体系と対応し、パロール(parole)的事象によって上聲に轉ずる点<sup>27)</sup>などでも対応する。『東國正韻序』の「字音上去無別」は、法華經諸本の同一字音が上聲・去聲の兩形を有する聲調實態<sup>28)</sup>と対応する。

このような聲調的観点から日本吳音の傳來経路を探るには、朝鮮側の古代聲調資料の欠落<sup>29)</sup>という重大な問題に逢着する。そのため、朝鮮漢字音に於ける歸納的聲調論ができていない現段階では、そういう聲調的観点によって日本吳音系字音の傳來経路を論じるのは不適切で、許されないことかもしれない。

しかし、祖系音となる六朝期方音の聲調的實態が明らかにされていない限り、文獻に見られる聲調的關連記事によって今もなお嚴然とした有力な経路候補者となるわけである。

## 8. まとめ

日本吳音は朝鮮漢字音と音韻的に対応するところが多いため、祖系音としての可能性を指摘されてきた。しかし、対応しないところも多く存在する。これに対して中國側の六朝期『經典釋文』の反切事象と共通するところが極めて多いため、その祖系音を朝鮮漢字音ではなく中國側に求めるのが穩當であると考えられる。

26) 奥村三雄『日本語アクセント史研究』(1995, p.581) 参照。

27) 河野六郎博士「諺文古文獻の聲点到就いて」(『朝鮮學第一』朝鮮學會, 1951)、『河野六郎著作集1』(1979, p.419, p.445)、及び、沼本克明博士『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就いての研究』(1982, pp.485-512)の「連音上の聲調変化による上聲の出現」などを参照。

28) 奥村三雄氏は「音節とアクセント」(『國語國文』22, 1953, p.20)で、來迎本、心空本(法華經音義)などに上聲・去聲の兩形並存を取り上げられた。

29) 朝鮮時代の旁点資料、現代の方言資料による趙大夏氏の「吳音の聲調について」(『日本文學』83, 立教大學, 2000)があり、参考となる。

また、そういう祖系音たる日本吳音系字音が如何なる経路で伝わったかという観点ではやや難しいが、中國南方の聲調が明らかになっていない限り、聲調的対応關係の記事が見られる地域の朝鮮半島を通して、或いは古代朝鮮に於ける知識層、渡來人などによって當時の正雅（規範）音が伝わったというのが非常に有力であろう。

こうしてみると山田孝雄博士の中國南方系字音を祖系音としている説には共感できるが直接傳來に至ってはこれからの研究課題に残すべきである。満田新造博士の朝鮮音による經由説は祖系音論としては惜しまれることであるが、傳來地域論としては充分あり得ることで、現在も有力な一説となっている。

このような考え方によると日本吳音系字音に見られる重(複)層性は、上古音から中古音に渡る六朝期の過渡期的字音事象が含まれているためとして説明され得る。しかし、上古から綿々として伝わった中國側に於けるその重層性は當然、時代性を以って説明すべきものであるが、過去、或る一定時期の正雅（韻書）音として受容した日本側では、中國側で成立する時代性で説明するのは當てはまらないことであろう。即ち、六朝期の共時的方音實態として日本吳音系字音の重層性を説明すべきではないかと考えられる。

## 【参考文献】

- ・王力(1980)『漢語史稿』中華書局, p.99.
- ・奥村三雄(1962)「いわゆる漢吳音の聲調について」『國語國文31-1』中央図書出版社, p.13.  
\_\_\_\_\_ (1995)『日本語アクセント史研究』p.581.
- ・金正彬(2002)「韓國漢字音と日本吳音との重層的類似点に就いて」(『廣島大學教育學研究科紀』第二部51號, 廣島大學.  
\_\_\_\_\_ (2003a)「臻攝に於ける韓國漢字音と日本吳音との類似点に就いて」『日本語文學』第21輯, 日本語文學會, pp.49-64.  
\_\_\_\_\_ (2003b)「流攝と遇攝に於ける日本吳音と韓國漢字音について」『日本語學研』第7輯, pp.31-43.
- ・河野六郎(1951)「諺文古文獻の聲点に就いて」『朝鮮學學報』第一輯, 朝鮮學會.  
\_\_\_\_\_ (1979)『河野六郎著作集1』平凡社, p.419, p.445.
- ・坂井健一(1975)『魏晉南北朝字音研究』汲古書院, p.37, p.355.
- ・高松正雄(1975)「中古正音」『國語國文44-6』中央図書出版社.  
\_\_\_\_\_ (1982)「字音「惑」「軟」について」『國語國文51-5』中央図書出版社.
- ・築島裕(1983)『大般若經音義の研究』勉誠社.
- ・原裕(1993)『訓点語と訓点資料』第101輯, 訓点語學會, pp.1-47.
- ・東辻保和(1971)『訓点語と訓点資料』第44輯, 訓点語學會.

- ・ 沼本克明(1978) 「吳音系字音の祖系音について」『國語國文47-7』中央図書出版社。  
\_\_\_\_\_ (1982) 『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就いての研究』武藏野書院, pp.485-512.  
\_\_\_\_\_ (1983) 「侯韻字の仮名書き音形を通して探る吳音の祖系音」『國語國文52-1』中央図書出版社。  
\_\_\_\_\_ (1995) 『近畿地方の古寺所藏文獻言語資料の総合的調査研究』平成6年度科學研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書, 研究代表者, 沼本克明, pp.136-163.  
\_\_\_\_\_ (1997) 『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院, p.452.
- ・ 満田新造(1964) 『中國音韻史論考』pp.606-624.

K C I

## 要 旨

日本吳音系字音資料に見える日本吳音は、唐代秦音体系を標榜するとされている日本漢音に對して六朝期共時的方音實態を表わしている、と言うのが今の定説である。このような体系性に乏しい日本吳音は、それだけの複雑な重層的特質、或は六朝期の『經典釋文』に見える音韻相通現象、『妙法蓮華經釋文』の新羅時代の順憬師、元曉大師の聲調事象などの特質も共に認められる。そのため、今までの日本吳音に於ける母胎論は、中國からの直接伝來說と朝鮮半島を通して受容したという朝鮮半島經由説とが兩立しているのが現状である。即ち、六朝期の支那方言とも緊密に結びついているとされている日本吳音に、朝鮮漢字音はどのように介在し、どれ程影響を与えてきたかに就いての歸納的究明は、課題として残されていると言える。

本稿では六朝期方音と日本吳音との間に、朝鮮漢字音は果たしてどのように介在したのであろうかと言う観点からの比較、對照分析を兼ねて、日本吳音系字音の祖系音には朝鮮漢字音と密接な類似関係が見られているとのことを証明した。しかし、六朝期の正雅音であろう字音事象も混入しているため、その傳來過程で朝鮮半島の地域的關係の可能性を論じるに先んじてその相違点について詳しい研究が行われなければならないことも論じ、重要な課題として残した次第である。

キーワード：祖系音、日本吳音、朝鮮漢字音、類似点、經典釋文、音韻相通

투 고 : 2005. 5. 31  
1차 심사 : 2005. 6. 11  
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (780-911) 경주시 강동면 유금리 위덕삼성아파트 110-403.

電 話 : 054-760-1534/010-6212-2239

e-mail : vvv534@hanmail.net